

## 志布志港の「みなと文化」

山畑 敏寛

---

## 目 次

第1章 志布志港の整備と利用の沿革.....	118-1
1. 古代・中世の志布志港.....	118-1
2. 近世の志布志港.....	118-3
3. 現代の志布志港.....	118-5
第2章 「みなと文化」の要素別概要.....	118-8
1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」...	118-8
(1) 信仰.....	118-8
(2) 生活用具・・・東道盆・硯蓋.....	118-9
(3) 参詣・・・伊勢参宮.....	118-9
(4) 人物.....	118-9
2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」.....	118-12
(1) 交易物資の保管施設・・・町家の土蔵.....	118-12
(2) 行政施設.....	118-12
3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」.....	118-13
(1) 港湾利用産業.....	118-13
4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、 人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」.....	118-14
(1) 芝居・・・大阪天満並木座で芝居見物.....	118-14
(2) 文芸.....	118-14
5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」.....	118-14
(1) 港町の町並み・・・浦町と浦町人.....	118-14
第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き.....	118-17
(1) 商家資料館.....	118-17
(2) 密貿易屋敷の復元.....	118-17
(3) 志布志歴史観光ガイド養成講座.....	118-17
(4) 志布志みなとまつり.....	118-17
(5) 津口番所の復元.....	118-18
主な参考資料.....	118-18
注記及び参考事項.....	118-19

所在地：鹿児島県志布志町

港の種類：港湾

港格：重要港湾



【位置図】



【現況写真】(鹿児島県港湾空港課)

## 第1章 志布志港の整備と利用の沿革

### 1. 古代・中世の志布志港

志布志市は鹿児島県の東端に位置し、宮崎県串間市に隣接している。明治16年(1883)に鹿児島県から宮崎県が分置されるまで、島津荘の中心であった都城と同じ日向国諸縣郡に属しており、明治31年(1898)に大隅国に編入された。

この地域の古墳の分布を見ると、畿内大和地方に起こった古墳が瀬戸内海から九州東岸沿いに日向を南下して大隅平野に及んだと考えるのが自然な流れのようである。この地方第一の古墳文化を築いた大隅直の一族は、志布志湾に面した一帯に居住していたので、最も早くから中央文化を海上から取り込むことができたと考えられる。志布志港を望む標高50mのダグリ岬の山上に築かれた飯盛山古墳〔注1〕は、鹿児島県内では最も古い前方後円墳(全長80m)であったが、この古墳を築いたのは大隅隼人の首領大隅直の一族、或いは同等の勢力を持っていた豪族の祖先ではなかったかと思われる。

この地方は救仁院高浜庄くいにいんたかはまのしょうといわれており、いつ頃から志布志と呼ばれるようになったか明らかではない。志布志町誌によると、志布志の名称は続日本紀749年(天平勝宝元)8月の条に「外正六位上曾そのあがためしふなどのあた郡主岐直志自羽志加禰保佐並外従五位下を賜う」とする贈位の条がある。即ち岐直加禰保佐とともに外正六位上から外従五位下に贈位があったということで、岐は船戸と同意で海辺の要港に依った豪族であることを示しており、族長志自羽志の名称が志布志の地名と関連性を以て考えられるのではなからうかとしている。

平安期になると大宰府の大監平季基が開発した島津荘は、8,000町を超える国内最大の荘園で、万寿年間(1024~28)に関白藤原頼道に寄進したものであるが、島津荘の庄衙のあったと思われる都城郡元より陸の駅路以外に水路を求めるとすれば、地形的にも救仁院高浜庄は最も近く便利であり、中央との接点として、またこの地方の文化と物資の玄関口として島津荘唯一の水門の役割を果たしてきた。

文治元年(1185)、鎌倉幕府は惟宗忠久を平家の掌握下にあった島津荘の下司職に補

任し、翌年地頭職に任じた。島津荘は外洋に開けた場に位置し、その掌握は大きな意味を持っていた。忠久は建久末年以降、荘園の名称を名字として島津氏を称した。

建久2年(1191)12月11日に、源頼朝は救仁院の地頭弁財使であった救仁院平八成直を解任と同時に、頼朝の下文〔注2〕によって救仁院は島津忠久に領地として賜った。島津氏が直轄領として所領となった最初の地が救仁院地方、すなわちのちの志布志郷である。

高浜の地名は川口の砂丘を意味するが、この頃、市街地の東部にある前川の河口は船の出入り、停泊地として集落をなしつつあったのではなかろうか。港としての役割は単に租米の輸送のためだけでなく、島津荘園の特産物が中央の貴族にとっては得難い貴重なものであり、特に当地の産であるビロウ葉は檳榔毛車〔注3〕に用いられる亜熱帯性特産物として積み出された。

志布志の名称を文献の上で最初に見るのは正和5年(1316)で、当時の前川河口から約500m上流にある宝満寺に敷地の寄進をした沙弥蓮正打渡状案〔注4〕に、「奉打渡日向方島津御庄志布志津 大沢水宝満寺敷地 四至境事…… 正和五年十一月三日 沙弥蓮正在判」と記されており、志布志津として港の名称が冠してあるように、志布志湾の中央部にある志布志の歴史は、最初から港町の歴史ともいえるものである。

志布志津は河口に権現島があつて波浪を防ぐ自然の良港となり、河口から上流に及ぶ川岸が船着場に利用されていたのであろう。宝満寺の敷地に接して旧大橋があり、船の運航を妨げないように、これより下流は近世まで架橋は許されていなかった。

遣唐使が廃止されたあと中国宋との貿易は、宋の商船が福建や浙江から大宰府に来て貿易を行った。南宋期になると日本商人の渡航も行われ民間貿易が盛んになり、密貿易も行われたようであるが、このことについて島津家文書〔注5〕に次の資料がある。それによると「島津庄官からの訴えで、今まで庄園内に着岸した唐船や宋船の処理についてはその庄衛が当たっていたのに、その先例に背いて大宰府がこれを管理した事についての抗議はもつともな事であるから、従前通り庄衛でこのことは処理しなさい」というものであり、このことでも島津庄園と中国、朝鮮との交流が考えられ、宋船などが志布志に度々着岸していたことがわかる。室町期以降に内外交易の要港として栄えた志布志津の歴史にはそれだけの背景があつたと思われる。

島津家六代氏久が正平20年・貞治4年(1365)頃から大隅地域の経営に当たるため志布志に居を定めるが、氏久は文中3年・応安7年(1374)に明の太祖に使者を派遣した。これに対して明側では、氏久が明に対して臣下の礼をとっていないので国家の正式の文書ではない(明に対して進貢とは認めない)とし、かえって倭寇の取締を要求されて交易の実現を見ることはなかったが、私的な交易が盛んに行われたことは確かである。

たとえば、天授2年・永和2年(1376)、志布志の大慈寺の二世剛中が宋版大蔵経2蔵を中国から取り寄せているが、大蔵経1蔵は約6,000巻といわれているので、2蔵となると分量だけでも相当な量となり、志布志津にそれが可能な交易の便と技術があつたことが考えられる。

それと、島津家七代元久が明德4年(1393)、室町幕府の將軍義満から上洛を命ぜられたとき、上洛延期の願いに虎の皮3枚、貂の皮2枚、支那名画4幅、支那銭1万疋を献上した。また、上洛に当って、將軍義持にお礼として馬1頭、絹小袖、錦、南蛮酒、

南洋砂糖、毛氈、麝香、青銅 2 千貫を贈ったと記録されている。この島津の財力は海港志布志を基地とした海外交易によるものであった。

明末の中国で倭寇に対処するという目的で編纂された籌海図編（鄭若曾著）の薩摩の港の中に審字署（志布志）と記され、鄭舜功がまとめた日本一鑑にも志布志とみえているが、中世に横行した倭寇は九州、南西諸島の港を根拠地としており、志布志の船人たちも直接にまた間接に関係したのであろうと考えられる。

志布志に「八幡そこ」と云う兵児謡がある。船遊びの歌とも古い海賊歌とも伝えられ、地面か板の間に正座して膝頭で拍子を取る荘重な調子は、或いは当時の面影を留めているのかも知れない。「はちまんそこからおいとしや、わがみがまにさ、ならばさ、なおもおいとしありがたや」の八幡は海賊船八幡船のことと伝えられる。

また、志布志の大太鼓踊りに使われていた古い歌詞に次の興味あるものがある。「そらゆく雲は どなたにゆくか にほんにゆけば やりたいものはかずかずあれど ゆみやといかけのひきでもの」

天正 15 年（1587）、豊臣秀吉の九州攻めのあと国割が行われたが、このとき島津氏は木脇、三ヶ名など 10 ヶ所を代地として差し出し、志布志を領有することとなった。宮崎県の歴史（1999 年・山川出版）によると、秀吉による日向の国割について、秋月氏は当初志布志・新納を領することになっていたが、島津氏が志布志は古来から東辺の要地であるとして諸縣郡木脇を代地に申し出たため、志布志は島津領となったとある。また串間市史には、「日向記に曰く櫛間（串間）、志布志、新納はこれを秋月家に賜ったが、島津氏の方便を以て代地を諸縣に出し、志布志を領有せりと、思うに志布志は古来島津氏の重鎮であったから」と述べている。

このことについて、北九州市の平嶺家に伝わる文書のなかに、「関白様が薩摩へ来たとき、旗本となって京都に行ったが物いりが多かったので、国許へ援助を頼んだら、親播磨から志布志ころころと云う銭三十貫を送ってもらった」という一節がある。

「ころころ」というのは「ころ銭」ともいい、中国明の洪武通宝という銅銭のことといわれているが、室町時代に永楽銭とともに輸入され、我が国で通貨として使用された。その当時「ころころ」という銅銭に「志布志」という名がつくほど志布志は海外交易で経済的に潤っていたときで、「志布志千軒町」といわれた豊かな港町であったので、島津氏にとって志布志はなんとしても確保しなければならなかったのではないか。

## 2. 近世の志布志港

徳川幕府が寛永 10 年（1633）に日本船の海外渡航を禁止したため、海外との交易の道は閉ざされた。そのため、大型の船や天文航法を取り入れた航海術などの進歩も見られなくなった。交易も千石船と呼ばれる中型船以下の船による国内交易に限られ、航法も陸上の目標に頼る山見法にかえり、長い鎖国の時代となる。

志布志津の海運もまた藩米の輸送を主とする国内交易へと代わらざるを得なかった。この地方の伝承として、中世からの海運業者として和田家・山下家の名が有名であるが、正確な記録は残っていない。江戸時代の志布志の廻船については、島津藩侍医曾榮の「無人島談話附録日州船漂流紀事」に、元禄 9 年（1696）、志布志浦運船十五反帆船戸弥三左衛門の漂流記録が最初である。この船は山下家の観音丸であったとされる。

その後、元禄 16 年（1703）の奈良東大寺大仏殿再興の記録に、虹梁（棟木）調査のときの藤後家明神丸、虹梁運搬の山下家観音丸の活躍が記されている。

次に挙げるのは、藩政中期以降に活躍した志布志の主な海運業者である。

山下家	山下弥三左衛門または三左衛門	商印	山	船名	観音丸
和田家	（せんこ屋） 和田吉左衛門	商印	吉	船名	第一住吉丸・幸榮丸
藤後家	（もきどん） 藤後浅右衛門	商印	今 又は 干	船名	明神丸・明福丸
又木家	（ごんぜどん） 又木武次衛門	商印	又	船名	大徳丸
肱岡家	（くわし屋） 肱岡三右衛門	商印	力	船名	金山丸
中山家	（やまさん） 中山三右衛門	商印	三	船名	住吉丸
近藤家	（さんごろぶね） 近藤三五郎	商印	五	船名	明德丸
中山家	（そごろどん） 中山宗五郎	商印	奈	船名	富吉丸
東田家	東田五右衛門	商印	東	船名	伊勢丸

これらのほか児玉家、岩切家などがあつた。勿論これらのほかに、海運関係の諸施設及び当時高度の技術を有する人たちが多数存在していたと考えられる。

天明 2 年（1782）の藩公御召船規則によると、御召船の平水手の印が檳榔の葉に改められ、また船矢倉船頭 2 人を志布志と内之浦各 1 名宛と定められた（志布志の沖に特別天然記念物の亜熱帯植物群落がある枇榔島があり檳榔樹が原生林をなしている）。

また、薩藩海軍史によると江戸中期以降の唐物などの蔵入れは鹿児島、志布志、向島などとあり、物資の内容は明らかにはできないが、輸入品は絹糸、絹織物、毛織物、薬種、香物、陶磁器、錫器等とある。すなわち琉球国からの貢納品が唐物の輸入品であるという。

また、国内交易品は、藤後家に残された明神丸覚書の享保 17 年（1732）から元文 2 年（1737）までについてみると、移入品は灯油、髪油、蠟燭、塩、昆布、木綿、布糸、団扇、傘、筵などが主であり、移出品では藩米の移出を中心として、杉、松、楠の木材、大豆、粳米、黒糖の農産物、鱒の塩付で、このうち黒糖と屋久杉は中継ぎ再移出である。

明和 5 年（1768）から安永 2 年（1773）の間の移入品は髪油、灯油、塩の量が増大し、新しく漆、海だて、線香などが加わり、移出品は飼肥杉、木炭、菜種子が新しく加わり、松材などが増大している。

移出入品を通じての特色は、まず藩米の運送を中心として大隅半島から島津藩領の日向諸縣一円の諸物資の搬出入と、南西諸島特産物の中継ぎ、それに唐物の密貿易が絡んだ商交が、九州一円、山陽、四国、畿内一円に行われ、さらに朝鮮国、琉球まで広範囲に行われていることが明らかにされている。

この覚書の中に「エボシ島廻し」の語が数多く出てくるが、これは現在の串間市高松の「ヨゴセ島」のことで、隣藩秋月領高松の烏帽子島に寄るのは風待ち、天候待ちと称し



【明神丸覚書】(昭和61年撮影)

ていたが、積荷の中には鎖国政策による多くの輸出入が禁止された物資が積載されており、少なくとも表向きは志布志津口番所の監視下にあるので、物資の荷積みは夜間に行い、風待ちと称して烏帽子島に廻船して諸準備を行い出航したようである。島津藩でも他藩領での臨検はできない。藩庁に於いても幕府に対して、海運業者を保護する上からも万事好都合であった。

以上、志布志津は藩米運送を中心として、黒糖その他の藩の専売品をはじめ、内外諸物資の交易と中継交易、密貿易などを含む経済的要地として繁栄したことが理解されるのであるが、幕府に対する配慮もあって、数量的な記録はほとんど残されていない。わずかに藤後家の明神丸、明福丸の航海日誌（覚書）の一部を残すのみである。

藩政末期志布志の廻船業は活気を呈し、千軒町の再来といわれる異常な繁栄ぶりが語られるのは、唐物の抜荷がなされたからだと伝えられる。

藩家老調所<sup>ずしよひろさと</sup>広郷が藩債整理の為にとった藩債年賦償還や専売制の強化などの政策がいかに効果的であったとしても、島津藩の国力の蓄積はあまりにも急であり、このことが抜荷による収益を藩自体が行ったか、または各港の廻船業者による抜荷交易をある程度黙認したであろうと考えられる点である。幕府の抜荷に対する取締の厳しい通達は度々くり返されているが、幕府の力が弱まるにつれ、島津藩では鎖国政策という特殊事情の条件の陰で抜荷交易を行うものが増えていたことは否定できない。志布志津の藩政末期における繁栄の背景にはこのような事情があって、志布志麓〔注6〕の武士と町人との強力なつながりがあり、他所にありがちな支配者と被支配者間の対立の構図は見られない。町内にある当時の商家や上級武士の家には、現在も貿易品と思われる陶器などが数多く残されている。

### 3. 現代の志布志港

明治に入り志布志港の海運業は次第に衰微してゆく傾向にあった。開国により全国の港が門戸を開き、抜荷による利益の独占が出来なくなった。廻船による藩米の輸送がなくなった。藩境がなくなり、次第に経済圏が拡大されていくなどの理由があったが、国内交易を中心とする従来の廻船業が、外国交易への転換に当たり、ついていけなかったのが実情であった。

それでも、明治に入ってから新しく営業を始める問屋や新造船もあったが、明治も20年（1887）以降になると、蒸気船や汽車が全国的に利用されるようになり、和船を主とした志布志の廻船業者も次第に衰微し、漁業主体に切り替えた一部の業者を残して、明治後期にはほとんど転業していった。志布志港の新しい胎動は築港の完成、鉄道志布志線の開通される大正末期まで待たなければならなかった。

当時の志布志港は権現島影の川口港として何らの防波施設もなく、交易港としての機能を失った旧態のまま放置されていたが、明治後期になると漸く九州南東部の要地として古い港湾の歴史の復活を要望する声が強くなった。

さらに、志布志港の修築に対して海軍からの意向があったことも見逃せない。明治40年（1907）以降艦隊の来航が頻繁となり、ときには60隻、70隻を越える大艦隊の碇泊もあった。これは港湾が広く、気候が温暖なため大艦隊の集結に好適な海域であったためであるが、物資の補給、将兵の休養のため上陸するには接岸施設がなく、波浪の高いとき

には汽艇、短艇が海岸に近づけず、上陸にすこぶる不便であったので、港の修築は海軍からの強い要望でもあった。

このような志布志港の修築を求める要求に対し、県は明治44年（1911）、港の測量調査に着手し、大正7年（1918）、県議会で志布志港修築の件が可決され、翌年12月起工式が行われた。工事着手後、大阪商船の定期船寄港など大型船の寄港が予想されたため、港内浚渫、物揚場などの改訂が行われ、昭和6年（1931）竣工し、昭和10年（1935）地方港湾に指定された。



【築港前の前川河口】(志布志町誌から転写)

第2次世界大戦で大きな痛手を受けた志布志港も、産業経済が復興するにつれて入港船舶も多くなったが、後背地の曾於郡と都城盆地は社会的に経済的に古くから結びつきの強い地域で、この地域の開発と経済浮揚には志布志港の整備が第一の条件であった。

そのため、前川河口から安楽川河口までの海岸線を埋め立てて工場用地とし、これに埠頭をつけた大型新港の構想を立て、志布志湾新港建設促進同盟が結成され、昭和42年（1967）、新港計画が決定された。

それ以降の経過は次のとおりである。

- 昭和43年（1968） 新志布志港起工式
- 昭和44年（1969） 国重要港湾指定
- 昭和60年（1985） 若浜地区（新港）竣工
- 昭和62年（1987） 開港指定
- 昭和63年（1988） 出入国港指定
- 平成8年（1996） 志布志港を中核国際港湾に位置付け
- 平成9年（1997） 新若浜地区起工式及び着工
- 平成16年（2004） 若浜地区旅客船埠頭竣工
- 平成18年（2006） 取扱貨物量10,292千トン、入港船舶数2,432隻
- 平成20年（2008） 新若浜地区一部竣工（52.2ヘクタール）

現在、若浜地区の完成以来、飼料関連企業を中心に多くの企業が立地し、日本有数の畜産地帯といわれる宮崎県、大隅半島への飼料供給基地として発展している。





【志布志港 中央緑の丘が前川河口の権現島】(平成16年6月撮影)

## 第2章 「みなと文化」の要素別概要

### 1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

#### (1) 信仰

##### ①お寺の町志布志

明治2年(1869)の廃仏毀釈以前、志布志の町はお寺の町ともいえるほど寺院の多い町であった。町の川向かいに曹洞宗永泰寺、724年(神亀年間)の創建と伝えられる真言律宗宝満寺には6院の脇立があり、前川の上流に九品寺、坊中8を有する真宗大性院、西谷に西楽寺、町に三福寺、海德寺、町の西には寺域8町に及ぶ興国元年・暦応3年(1340)開山の臨済宗大慈廣慧禅寺があり、塔頭16を数えた。

そして街区の北東角ごとに地蔵を祀って、角地蔵と称していた。藩政時代の町場で角地蔵を街区の角ごとに置いているところは他にない。廃仏毀釈の難で角地蔵も壊されたが、信仰の自由が許されるようになって、20体近い角地蔵が壊れた痛々しい姿でよみがえっている。(廃仏毀釈=明治元年(1868)の神仏分離令で仏教を排斥した政策)

この他、町には諏訪大明神、波上権現社、恵美寿社、祇園住吉社(八坂神社)、秋葉権現、西宮恵比寿、神明宮など多くの神社があったが、これらの信仰を支えたものが、港町志布志の大きな経済力を物語るものといえよう。

##### ②八坂神社と航海安全

当町繁栄と海上安全のためとして安永6年(1777)に勧請した八坂神社は、藩政期は祇園住吉社と称し、町中央にあった八間山の下浜辺にあつて二神相殿であった。

明治24年(1891)、門前火災により神社が焼失したため一時諏訪神社の相殿となったが、明治35年(1902)、氏子により津口番所跡に社殿を造営し遷宮された。大正12年(1923)、水洗町(志布志1丁目30)に新殿を造営し遷宮。昭和31年(1956)、現在地(志布志2丁目)に遷宮。

##### ③西宮恵美寿

大慈寺門前にあつた。摂州西宮から勧請、春秋両度、漁師たちが祭りをしていた。のち八坂神社に合祀。

##### ④剛中和尚と大蔵経

大慈寺二世剛中は、当時大隅守護として志布志城にあつた島津氏久の協力を得て、弟子10人を明に送り、渡明3年後の天授2年・永和2年(1376)に宋版大蔵経二蔵を取り寄せ、一蔵を京都東福寺に寄せ、一蔵は大慈寺に納めて読了した。一蔵は約6,000巻といわれ、大慈寺のものは火災によって1巻を残すのみである。東福寺では経蔵が崩壊したため大蔵経は暫く仏殿内に架蔵されていたが、寛政5年(1793)、現存の転法輪蔵(経蔵)が完成し、ここに納められている。剛中玄柔禅師は元中4年・嘉慶元年(1387)、東福寺主五十四世となった。

##### ⑤志布志三十三所観音

大慈寺門前の小畑長兵衛、水洗町濱田三左衛門と諏訪町の中山安左衛門の三人が西国三十三所観音巡礼に行った。西国三十三観音霊場は近畿にあり、熊野那智の青岸渡寺を一番として、和歌山を北上して大阪に入り奈良、京都、兵庫、滋賀から最後に岐阜の華嚴寺を結番とするもので、当然船で行ったであろう。

三人は帰ってから三十三所観音を志布志にも建てたいものと思い、山伏の前田善長院に相談したところ、善長院は大慈寺の方丈山圓和尚にこのことを申し上げた。和尚は快く聞き入れ、宝満寺圓秀和尚、大性院盛岸法印、永泰寺法雲和尚、海徳寺龍淵上人など百有余の僧都が集まり、享保20年（1735）3月18日、宝満寺如意輪堂をはじめとして三十三所に札を打って開基した。〔注7〕

#### ⑥大慈寺と琉球僧の墓

大慈寺四十五世龍雲和尚は島津義弘の軍僧として朝鮮出兵にも従っているが、天正16年（1588）から藩命を受けて琉球に三度使いした。その折り彼の地で布教を行い、以後大慈寺は琉球僧俗の学問所となった。

旧大慈寺墓地には墓地移転まで多数の琉球僧の墓があった。現在大慈寺開山堂の墓地、宝地庵墓地に琉球僧の墓の一部が残されている。

当時の記録に「禅門に学ぶ雲水100余人、一日に4斗の米を炊く」とある。



【琉球僧の墓】(平成20年10月撮影)

#### (2) 生活用具・・・東道盆・硯蓋

琉球との交流を示すものとして、琉球の壺屋焼の飾り壺などとともに東道盆や硯蓋などが多く残されている。東道盆は高足台のついた盛盆で豪華な琉球塗りが多く、硯蓋は口取肴を盛る器で、客人の接待、祝いの席で用いられた。



【琉球塗りの東道盆  
(中の小皿は大理石)  
(昭和61年撮影)

#### (3) 参詣・・・伊勢参宮

志布志郷伊崎田村の白鳥神社大宮司田野邊主膳に伊崎田村、田之浦村から11人が同行して伊勢参宮をした記録「御伊勢参宮道中記覚付横目帳」がある。それによると、文化3年（1806）、志布志東田五右衛門の伊勢丸で8月2日出帆、11月9日に帰っている。出帆の前日は東田五右衛門方に泊まり、朝四ッ時（10時頃）に小廻り船で串間まで渡っている。航路は佐賀関、備後鞆などを経て9月15日大阪に着き、伊勢参宮は23日で、帰りは比叡山、京都辺りを参詣見物などして、10月26日朝大阪で帰りの船に乗っている。

島津藩の農民の年貢負担率は8公2民といわれ、他藩に較べ著しく負担が重かったといわれており、伊勢参宮など考えられないと思われるが、この伊勢参りに同行した11人は農民である。港を控えたこの地域では、商人だけでなく農民なども京都・大阪辺りの霊場巡りや伊勢参りなどで見聞を広げる機会が多く、新しい文化を吸収することができたのではないかと推測される。

#### (4) 人物

##### ①東大寺の虹梁運送

航海の技術については奈良東大寺大仏殿の虹梁運送の記録がある。永禄10年（1567）の兵火で焼失した東大寺の大仏殿は、元禄になって再建されることになった。巨大な木造建築の梁木には、赤松の中身が必要で、赤松の中身の紅色からこのような梁

木は虹梁と呼ばれる。元禄 16 年（1703）に、日向の霧島山から伐り出された赤松の巨木 2 本（長さ約 23.4m・元口径 1.2m～1.3m・末口約 1m）を、鹿児島県の山川津を 7 月 6 日九ッ出船して 12 日昼に兵庫までわずか 6 日半で搬送したのは、志布志の廻船業者山下弥五郎であった。これは千石船を沈めて梁木をその上に引き寄せ、五百石船 2 艘で浮力を与えながら海水を汲みだし浮揚させるという方法で巨木の船積みを行い、台風の余波による南風を待ち受けて一気に北上する航法をとったのであった。弥五郎の運んだ虹梁は、今なお東大寺大仏殿の建築の中心を支えている。

### ②加治木銭と明浦和尚

室町時代に、明の勘合貿易船は堺港への往来に島津領日向国外浦に寄港していたが、当時外交文書をつかさどっていたのが志布志の大慈寺住職明浦和尚であった。明浦和尚は加治木安国寺の住職を兼務していた関係もあり、勘合貿易船の往復に際して志布志に多くの支那銭が入った。その中の洪武通宝を模して、室町末期から江戸初期まで島津氏によって加治木で鑄造されたものが加治木銭と呼ばれる貨幣で、加治木銭は裏に加・治・木の文字を鑄込んであった。領内の通用のみならず、東シナ海交易にも使用された。

### ③白銀堂と児玉左衛門

沖縄糸満市の白銀堂由来に、藩政時代の志布志の廻船業者児玉左衛門の話が残され、琉球との交流があったことを物語っている。

むかし児玉左衛門から金を借りた糸満の漁師美殿は、不漁で期日までに返すことができず恥ずかしかったので隠れていた。これを見つけた左衛門は違約を怒って切ろうとしたが、美殿は、「沖縄の諺に“意地出らば手を引き手出らば意地を引け”というのがあります。短気に走って刀を抜くなという意味です」といって許しを求めたので、一年の延期を約して別れた。

左衛門は国に帰り真夜中に家に帰ると、妻が男と添寝をしていた。怒って刀を抜いたが、美殿の諺を思い出して、明かりを点けてよく見ると、男と思っただけで妻を守るために男装した母であった。左衛門は母妻殺しの大罪を犯さなかったのは美殿のおかげであると思い、翌年、美殿に会ったとき「返金はいらぬ。あなたのおかげで母と妻を切らずにすんだ。あなたは恩人だ」と告げた。しかし美殿も借りた金を返すのは人の道だと言って互いに譲らず、結局美殿が隠れていた岩穴の中に金子を埋めて二人の志とした。こうして白銀堂物語の諺が生まれ、ここを聖地として神社を建て、糸満の繁栄を祈願する守護神として崇めるようになったという。

糸満の乾光子さんが志布志に現地調査をして、左衛門は志布志の廻船問屋であった児玉伝左衛門実好であることがわかった。児玉伝左衛門実好の墓は児童公園にあるが、文政 8 年（1825）、81 歳で没しており、彼が海運業で活躍したのは 1764 年（明和年間）～1800 年（寛政年間）頃と思われる。

### ④日本一の気象予報士「日本どん（日本善作）」

航海をする者にとって航海の技術は勿論であるが、天候の予測も重要な知識である。志布志の船頭日本善作は天気占いをよくし、当時の藩主（島津 22 代継豊と思われる）から日本姓を与えられたという、今でいう日本一の気象予報士であった。家伝によると藩主が志布志港から鹿児島港に回航するときの船頭で、日本晴れを予告して御意に叶ったと伝えている。もとは小幡姓で、寛保 3 年（1743）没。子孫は今も肝付町内之浦に居住する。

志布志では日本どんの天気あてとして話が伝わっている。善作さんは大隅半島の山にかかる雲の具合や、権現島に上がっている幟の具合、自分の肌で感ずる湿り具合などで天気を占っていた。善作さんの天気占いはあまりにも見事に当たるので、殿様が感心されて「お前は日本一の天気占いじゃ」とおほめになり、日本という名字を与えられた。



【日本どんの墓】  
(平成20年10月撮影)

### 志布志に伝わる日本どんの天気あて

日本どんにも失敗がありました。殿様が武術の試合をする日を決めようと、鹿児島のお城に召して天気の占いをさせました。日本どんは、殿様の御召ということで下着や下帯も絹物に新調して出かけました。御殿の中で天気を占うことになった日本どんは、へたん山（大隅半島の山）も見えず、方角も雲の様子もまったくわかりません。もじもじしていると殿様が「それでは、雨についてはどうか」とたずねました。

みんなが固唾<sup>かたず</sup>を呑んでいると、日本どんは、おそろおそろ顔を真っ赤にして、「出かけるときに絹の新しいのと取り替えたものですから、股の湿り具合が何もわかりません」と答えましたので、殿様も役人も大笑いされてなるほどそうだったのかと納得しました。日本どんも、とがめも受けずことなきを得てほっとしました。それから志布志に帰って、いつもの志布志の浜で自分の肌で感ずる「キン」観測をしたということです。

### ⑤中山宗五郎と密貿易屋敷

志布志の幕末の商傑といわれた中山宗五郎政鴻は、1844年頃（弘化年間）から明治初期までの間に活躍し、一代分限の一代貧者と呼ばれている。志布志には代々の富裕な廻船問屋が多かったが、彼の名が特に有名であったのは、彼の商法はほとんどが抜荷中心であったと思われることと、彼の残した三階木造建の大建築が、のちに密貿易屋敷と呼ばれたほど、最初から抜荷を目的とした特異な設計がなされていたためであろう。



【中山宗五郎屋敷裏（側昭和35年取壊された東棟）】  
(昭和35年撮影)

屋敷は当時「志布志で不思議は宗五郎<sup>そごろう</sup>どんの屋敷、表二階に裏三階<sup>きんげ</sup>、中はどんだんめぐいの四階建て」と唄われており、表通りから見れば二階建て二棟続きの家であったが、裏から見れば東側の一棟は途中から三階になって、高い屋根裏を利用した三階の大部屋が海に面して設けられ、部屋には長さ1間（1.8m）に近い望遠鏡が置かれていた。

二階の大廊下から三階へ行くには取り外しの出来る梯子を上がったが、梯子の途中西側の板壁は細工された密室の引き戸になっていた。また二棟の間にも二階の部分に部屋があって、板壁を利用する出入口があった。

入り口の東側の土間の下に石をたたんだ堅牢な地下石室があった。この屋敷の主要部分であった東側の三階建ては、昭和35年（1960）に取り壊され、地下室も埋められたのは惜しまれている。

## 2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」

### （1）交易物資の保管施設・・・町家の土蔵

藩政末期の志布志では千軒町の再来といわれるほどに繁栄しているが、「やまさん（中山三左衛門家）・くわしや（肱岡家）の財宝は海の水のようだ」とか、「ごんぜどん（又木家）の店には馬の角以外のものはなんでもある」といったような当時の噂が残っている。

志布志の廻船問屋は多かれ少なかれほとんどこの唐物の抜荷に関係していたものと思われ、各所に残る土蔵はこれらのものを収納保管していたと思われる。

薩藩海軍史にある志布志の唐物蔵は、下代蔵<sup>げだい</sup>の並びにあったようだ。

### （2）行政施設

#### ①津口番所<sup>つぐちばんどころ</sup>

昭和6年（1931）、港が竣工するまでは市街地東部の前川の河口が港として使われていた。この前川河口の右岸に津口番所跡がある。敷地は独特の石組で築き上げられた長円形の小さい台地となっており、石垣の一部が残っている。

島津藩の津口番所は宝永元年（1704）御答書には24ヵ所が記されている。これらの内薩摩の脇本、大隅の内之浦、日向志布志の津口番所の船改めを受けないと、他領自領の船籍如何にかかわらず他領への出航はできないことになっていた。津口番所の改めは、あらかじめ津口番所の印鑑を大阪奉行に差し出しておいて、これによって送り状切手と照合することになっており、出航のときに手形を受け、帰帆するとまた津口番所に返していた。

志布志の津口番所は、寛永17年（1640）10月11日、志布志衆中（志布志在住の武士）の酒匂新右衛門と越前坊に川口改めの役を申しつけられたのがはじまりである。途中から鹿児島城下衆が勤めるようになり、志布志衆中が加番するようになった。志布志の町は密集して火災が多かったため幾たびか類焼をくり返したが、瓦屋根になり、周りに火除



【津口番所跡の石垣】(平成17年8月撮影)

けの木を植えてから類焼を免れるようになったという。

## ②下代蔵・出物蔵

津口番所の約 150m 上流右岸に、島津領日向の志布志・末吉・松山・都城・勝岡辺りからの年貢米を納めた下代蔵・出物蔵があった。下代蔵は年貢の収納保管倉庫で、出物蔵は出物（年貢の運送中の落米分や運送費に充てる年貢の附加米）を収める蔵である。正保 4 年（1647）までは前川左岸にあったが、町の大火毎に類焼したので、武家屋敷地区と浦町（商業地区）の境に移した。現在「蔵之馬場」として地名が残る。

## ③蔵奉行所

下代蔵、出物蔵の管理、蔵米の出納、保管のため鹿児島城下からの役人が詰めていた。志布志組といわれていた。

### 3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

#### （1）港湾利用産業

##### ①漁業・・・椎皮・八田網漁

藤後家の「明神丸覚書」に、元文元年（1736）11 月 22 日伊予宇和島港で「椎皮 400 貫目」、12 月 11 日に「四つ張三網」を買付ている。椎皮は、椎の樹皮でタンニン及び褐色素を含み、その煮汁を漁網用の渋とするので、綿糸で作った漁業用大敷網を作るための必需品である。また四つ張網は当時の近代漁法であった八田網に使用されたもので、この地方で八田網がすでに使用されていたか、このときはじめたものであろうか。

##### ②農業・・・「山だて・海だて（骨粉肥料）」と菜種子栽培

「山だて」〔注 8〕は牛馬骨、「海だて」は鯨骨のことで、火山灰土壌の鹿児島に適した肥料として骨粉にして使用された。江戸時代の廻船業者であった藤後家に残る航海日誌「明神丸覚書」の元文元年（1736）4 月 11 日帰り荷に大阪で「山だてこやし 2,000 貫」を積荷している。「海だて」は明和 7 年（1770）10 月 22 日に土佐浦戸港での「海だて 20 貫物 1,100 俵」が初見で、あと串本などからの積荷を見ることができる。

また、明和 6 年（1769）1 月 14 日に志布志からの積荷として菜種子「1,570 呎」がはじめて記録され、以後積み出されるようになっていたが、食用、灯用としてしだいに特産品として菜種子の生産が増加しつつあることを物語る。

志布志では津口番所の海岸隣川口に豊民館を置き、ここで関西・四国から移入した牛馬や鯨の骨を骨粉とし、諸縣郡から大隅地方に販売した。しかし町中に臭気を放つので、のち波見に移された。

##### ③漆器製造・・・漆の移入

「明神丸覚書」明和 8 年（1771）3 月 9 日、大阪からの下り便に「うるし 20 貫」がはじめて見え、以後しばしば積み込まれている。当地に新しい手工業が芽生えたのか、或いは琉球塗りの原料として中継したものであろうか。尾道市郷土史、因島市史に「日向国志布志船明神丸商交取引品に琉球産の荷物」とあるので、公にできない裏面の交易があったことは否定できない。

#### 4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

##### (1) 芝居・・・大阪天満並木座で芝居見物

藤後家文書明福丸の航海覚書明和8年(1771)3月4日に、船頭藤後清房が船頭代小三郎以下船子一同に大阪天満並木座の芝居を見せている。当時大阪の並木五瓶は、近松亡きあとの文豪また劇作家として評判高く、並木座に行くことは、新しい文化の吸収の意味もあった。また、安永元年(1772)2月8日に海の中道(福岡県)でルソン船(オランダ船か)と行き交ってその巨大さに驚いている。廻船業に従う者達の見聞によって、当地へ新しい文化がもたらされたことは疑いないところである。

##### (2) 文芸

###### ①町人の教育・掟

志布志浦町の町人は交易を中心とする職業の者が多く、他国商人との対抗上學問が奨励され、また必要不可欠のものであった。読み書きは勿論、高い社会的見識も要求されたものと考えられる。各寺院は、これらの要求を満たすための学問所の役割を果たした。

町の二才(青年)を対象として、町役所が文政10年(1827)に出した「掟〔注9〕」に、「家業の商売油断無く心がけ、その上暇を得候折りは、筆算諸稽古等怠らざる様肝要為る可き事に候間・・・」と遊興を戒め、学問稽古などを怠らないよう心掛けるように定めてあるが、町人の子弟に対する掟書きは、島津藩内では他にない。

海運業の藤後家に明和3年(1766)の算用手習書、天保4年(1833)の手習教訓書、嘉永4年(1851)の書取留、万延元年(1860)の書取留があるが、藤後伊太郎自筆の漢字書取に「船中、外国、貿易」の文字が見られ、1860年17歳の同清次の自筆書取帳の漢字の中に「1, 2, 3, 4」の算用数字や「I、II、III、IV」・「C、D、E」などの外国文字の練習のあとが見られるのは、当時の浦町商人たちの進歩的な気風、意欲を物語るものである。また第二学年と学年を記したのは寺子屋教育がすでに一定の組織をもって行われていたことを示している。

###### ②海徳寺の天神画像と連歌

天明3年(1783)に志布志の地誌として書かれた「志布志記」に、時宗海徳寺の宝物であった天神画像は「歌連歌の会席にこれを掛け置くに、連衆の中秀逸の句を出して神慮にかなうときは、画像の顔色、笑みを含ませ給う」とある。

海徳寺は延元3年・暦応元年(1338)の開基で、浦町の中にあった。島津藩ではほとんど武士階級の間で俳諧・連歌の会が行われたようであるが、志布志では浦町にあったお寺で歌・連歌の会が催されていたことがわかる。この天神は御酒を捧げると自然と顔が赤くなったので酒天神ともいわれた。

#### 5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成された「みなと文化」

##### (1) 港町の町並み・・・浦町と浦町人

島津藩では藩法上、志布志のような港のある町場(商業地区)を浦町と称した。浦町の住人は浦町人といい、ほとんどが商業・海運に従事するものが多く、水主賦役を負担し、運上銀を上納したり、大船持ちは御用船をつとめた。藩財政は上方及び琉球の物資や貿易



に頼るところが大きかったので、浦町の果たす役割は非常に大きく、また御用船勤めのついででの貿易の利潤は大きかったので、浦町には豪商が多かった。島津藩の浦町は薩摩に26カ所、大隅に9カ所、日向に志布志が1カ所で計36カ所あり、宝暦11年(1761)の志布志浦町の戸数は420戸を数え、藩内では鹿児島に次ぐ大きな町であった。

町場は西の大慈寺と東は前川の間で成立し、その間約400m、山手から浜辺までの約200mの範囲に整然とした町割りがされ、金屋町・戎町・紺屋町・薬師町など十カ町が存在し、多様な職種で賑わっていた。町割りは間口が約3間半で町場特有の細長い敷地形状をしている。間口を狭く奥行きを深くすることで、沢山の店が軒を並べることが可能になる。



【町場地区略図(西の水筋と東の前川の間が町場地区、水筋から西は大慈寺と門前、火除けの八間山がほぼ中央を南北に走る)】(志布志町誌付図から作図)

町場の集落成立を示す資料はないが、海徳寺(1338年開基)・大慈寺(1340年開基)が創建された14世紀前半頃から町場の祖型ができたと考えられる。明治4年(1871)に加筆された「春の夜夢の巻」によると、町場は家屋が密集して火災が多かった。そのため慶安元年(1648)に国君に願い出て八間山が仕立てられた。

この八間山は町場を東西に分けるように、町中央の山手から浜辺に椿、檜などを植えた幅8間(約15m)の防火帯で、県内には他に類例がない。町場が大きい故に成立した防火的仕掛けであったろう。

それで火災は八間山で食い止められたが、それぞれ東町・西町の火災は免れなかったようである。角地蔵で年代のわかったものの最も古いものは正徳5年(1715)であるので、17世紀の初頭には町場の街区・街路は成立していたのではないかと思われる。

この八間山は明治3年(1870)の大火によって焼け、取り除かれた。

町場には、志布志記によると、山下、又木某など申し候て、大身なる町人ども数多罷り

居り候て、大船も数艘所持致したる由、酒屋も数軒の由とあり、酒屋 4 軒、焼酎屋 8~15 軒、麴屋 4 軒など、これらの商人を中心に質屋、呉服屋、瀬戸物屋、薬屋、金物屋から荒物屋、小間物屋、お茶屋や海港にちなむ料理屋、宿屋などが軒を連ねていた。

町家には比較的大きな遺構があり、大きな町家は基本的な間口（3 間半）で、漆喰を用いた蔵作り風の建物や土蔵が分布していたが、この地域に名字御免の町人〔注 10〕が 46 家あり、そのほとんどが廻船業或いは網元であった。

### 第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き

志布志は島津荘の水門として古くから港があり、国指定史跡の中世山城志布志城とそれを囲む武家屋敷、古い庭園、藩内随一のにぎわいを示した町場など優れた歴史的遺産を生かして地域振興に結びつけようと、平成2年（1990）3月に「ふるさと創生資金」の一部を運用して、町民の参加（会費 1,000 円）による「歴史の町づくり委員会」を組織し、日本ナショナルトラストの専門的な調査指導と活動助言を受けながら活動の成果をまとめ、「歴史の町づくり」として、町への提言を行ったのは平成3年（1991）5月であった。町ではこの提言を受けて、平成6年（1994）に「歴史の町づくり基本構想」として町の振興計画の中に位置づけした。この中に港に関する部門も当然に含まれているので、その中から示したい。

#### （1）商家資料館

明治15年（1882）に建造された山中家住宅は、江戸末期の面影を残す2階建土蔵作りの商家と1,269㎡の広い敷地を有し、後方に土蔵3棟がある。平成17年（2005）、志布志町が取得し商家資料館として町づくりの拠点とするよう整備を進めている。

商家資料館保存計画書（平成17年町教育委員会）によると、母屋と3棟の土蔵に

- 民俗資料・山中家の家具・什器等
- 琉球漆器資料・漁業資料の展示
- 観光案内所・地場産品展示即売所

などを配置する予定とある。



【山中家住宅】(平成14年8月撮影)

#### （2）密貿易屋敷の復元

2階建て土蔵作りの建物の一部が残っている。平成17年（2005）に宗五郎屋敷の発掘調査を実施し、石室が発見された。隠し2階などがあった3階建ての部分の敷地が残っているため、密貿易屋敷として復元する構想がある。

#### （3）志布志歴史観光ガイド養成講座

2008年度から2ヵ年計画で、自然と歴史・文化について一定水準のガイドサービスが提供できるガイドの養成を、教育委員会が実施している。定員は20名。

#### （4）志布志みなとまつり

以前あった花火大会を、昭和60年（1985）頃から新港若浜地区で「志布志みなとまつり」として7月に開催している。花火大会・舞台演芸の他、フェリーさんふらわあクルージング・巡視船の体験航海などがある。

### （５）津口番所の復元

津口番所跡は市有地で現在民間に貸し付けているが、港の町に関係の深い史跡であるので、将来ミニ博物館として津口番所復元の構想がある。

#### 〔主な参考資料〕

- 志布志町誌上巻・下巻＝志布志町  
志布志の郷土史読本＝志布志町教育委員会  
志布志町郷土史資料・志布志記、花筐他＝志布志町教育委員会  
志布志の民話＝志布志町教育委員会  
志布志麓の構成とその遺構（志布志町文化財調査報告書 5）＝志布志町教育委員会  
志布志町「歴史の町づくり」基本構想＝志布志町  
春の夜夢の巻＝慶応 2 年・福山寛光誌、明治 4 年加筆  
鹿児島大百科事典＝南日本新聞社編集・発行  
日本史広辞典＝山川出版社  
おきなわ村の伝説＝青山洋二著 那覇出版社  
宮崎県の歴史＝山川出版社  
串間市史＝串間市編集・発行

## 〔注記及び参考事項〕

## 〔注 1〕 飯盛山古墳

飯盛山古墳は志布志湾を一望できる志布志港から 3km 東にある標高 50m のダグリ岬の丘陵の頂にあった。前方部の低い古式の前方後円墳で、全長約 80m、前方部の長さ 43m、幅 20m、高さ 1.5m、後円部の長さ 37m、幅 30m、高さ 4.5m の規模で台形埴輪、曲玉などが出土している。昭和 38 年（1963）、国民宿舎の建設に当たって、関係者の不注意で事前調査をする前に破壊された。

## 〔注 2〕 源頼朝の下文（僧侶を殺した救仁院成直の知行を取り上げ、忠久に与えた）

源頼朝下文案

島津庄住人不随忠久下知之由、有其聞、尤不当事也、慥可相從件下知、兼又救仁院平八成直殺僧畢、所行之至、不敵事也、於件所知者、可為忠久沙汰之状如件

建久二年十二月十一日

## 〔注 3〕 檳榔毛車

毛車とも云い、平安時代に太上天皇以下四位以上の者が使用する乗用の牛車を白く晒した檳榔の葉で、箱車全体を覆ったものである。

## 〔注 4〕 沙弥蓮正打渡状案

奉打渡 日向方島津御庄志布志津大沢水宝満寺敷地四至境事 限東深小路大道 限南経峰 限西河 限北天神山後堀 右任被仰下之旨 奉打渡宝満寺之状如件

正和五年十一月三日 沙弥蓮正在判

## 〔注 5〕 日宋貿易関係の島津家文書

自近衛殿被仰下島津庄官訴申、為宰府背先例、今年始以押取唐船着岸物事、解状遣之、早停止新儀、如元可令付庄家也、適為被仰下事之上、如状者、道理有限事也、仰旨如此、仍以執達如件

## 〔注 6〕 麓

島津藩独特の制度で、藩内を 113 の外城（行政地域）に区分し、それぞれに地頭仮屋（役所）を置き、その周囲に武士集落をつくって麓と称した。麓に居住する武士を外城衆中と唱えていたが、天明 6 年（1786）から郷士と称するようになった。鹿児島に居住の武士は鹿児島衆中と呼んでいたが、のち城下士と呼ぶようになった。城下士と郷士に身分的な差別はない。住居地域を異にしただけのことである。

## 〔注 7〕 志布志の三十三所観音

明治初年の廃仏毀釈によって壊され現在数カ所残るだけである。

一番寶満寺如意輪堂	二番同所地藏堂	三番永泰寺網掛観音	四番岩本坊
五番波上権現	六番溝江窟	七番夏井観音崎	八番夏井濱ノ堂
九番夏井水之上	十番夏井弁財天	十一番外之牧	十二番益倉
十三番別府	十四番菖蒲山	十五番前田善長院	十六番大性院
十七番九品寺	十八番明星院	十九番方丈川	廿番諏訪社
廿一番三福寺	廿二番海徳寺	廿三番大護庵	廿四番安楽山口宮
廿五番安楽千手院	廿六番安楽岩戸	廿七番安楽百堂穴	廿八番安楽真福寺
廿九番安楽山寺	三十番安楽木迫	三十一番巨山寺	三十二番仏心院
三十三番大慈寺			

## 〔注 8〕 山だてと骨粉肥料

鹿児島で骨粉を肥料として使用したのは、安永年間（1772～80）、現在の知覧の船商人仲覚兵衛なかかくべえが、大阪で繁生している雑草の周辺に散在していた獣骨を見て、これを菜種子に試供したことに始まるとしている（鹿児島大百科事典）が、明神丸覚えでは元文元年（1736）に山だてこやしを移入しており、明和6年（1769）には菜種子の積出をしている。

## 〔注 9〕 掟

町の二才にせ（青年）を対象として町役所が文政10年（1827）に出した「掟」で、九条から成る。

- 一 御上様より仰せ出され候御法度の趣、堅固に相守り申すべき事
- 一 諸御奉公人様方は勿論の所、御役々様、其外諸士様方に対し粗礼仕の間敷候、並びに町役衆も同前相心得、時々申し付けらる儀、違背致す間敷候
- 一 父母兄弟に限らず、同輩仲むつまじく相交わり、互いに礼儀乱れず、随分神妙に付き合い申すべし、就中多人数打ち寄り候ても、諍論がましき儀決して申す間敷候、……
- 一 組々三つに相分け候儀は、二才中多人数の事候につき、何ぞのときを……
- 一 家業の商売油断無く心がけ、其上暇を得候折りは、筆算諸稽古等怠らざる様肝要たるべき事に候間、その旨忘却致す間敷候、或いは徒の徘徊又は御法度の博奕……以下略

## 〔注 10〕 名字御免の町人名

有川	井手	岩戸	井上	岩切	飯田	今井	宇ヶ村	岡留
大垣	小野	小山	加治木	川崎	黒木	近藤	児玉	五代
児嶋	坂元	崎濱	田原	田代	高木	束田	津曲	藤後
取付	尖	中山	中野	日本	濱田	波見	萩原	邊輪
又木	益倉	益江	村岡	山下	山角	山元	吉川	和田
和佐			以上 46 家					

志布志記には以上の46家が記載されている。他の資料に小幡・山中・竹井などの名字が見えるので、この他にも名字御免の町人がいたのではないかと思われる。

〔参考 1〕 武家屋敷の庭園様式

志布志の武家屋敷の庭園は、国指定名勝になっている福山氏庭園・天水氏庭園をはじめ多くの庭園が、表面に小さな凹部の多い海石を主石組として構成し、石作りの庭門や芭蕉の植え込みなどに琉球方面の造園形式に通ずる特徴が見られるものが多い。

〔参考 2〕 網掛観音

現在宝満寺公園に高さ約 2m の観音石像が祀られている。この観音はむかしこの浦の漁師大垣氏の者が、この浦に網を下ろしていたところ、網の中に何者かわからなかったが、海中を照らして来るものがあつた。如何なる珍魚かと力を出して引き上げてみたら、魚ではなく、威厳を備えた観音様が現れたので、不思議の思いをして、謹んで信拝し永泰寺へ祀つたという。明治初めの廃仏毀釈で地中へ埋められた。大垣氏の子孫は今も健在。